

主の昇天 (マタイ 28:16-20)

多くを抱えている、それは天に上る近道



主の昇天の祭日を迎えました。本来は今日は年間第7主日であることは、先週の主任司祭のミサにあずかった人、YouTube をご覧になった人は理解しているでしょう。そこからしみじみ考えることは、日本はまだまだ宣教が必要な国なんだな、キリスト教が十分浸透した国に遠く及ばないな、ということです。聖フランシスコ年に、一人でもいいからキリスト教の種を蒔きたいものです。

金曜日はヒヤヒヤものでした。阪神対広島戦で、8回までに広島が2点リードしていて、私はこう思ったのです。「あー、またサヨナラ負けの序章が始まったな。9回裏に抑えのピッチャーが出てきて、10球かそこから投げて、逆転サヨナラホームランを食らって終わりか・・・はぁ」そういうことです。しかし金曜日は違いましたね。先発のピッチャーがみごと完投完封勝利を収めて、私もほっと胸をなでおろしました。阪神ファンの皆さん、申し訳ありません。でも阪神はたくさん勝っているのだから、一回くらい負けてもいいでしょ？広島は一回勝ったら五回くらい負けるので、私の部屋の焼酎の瓶はほとんど減らないです。5月は、風向きが変わってくれたらなぁと願っています。

今年の主の昇天で、素晴らしいアイデアが降りてきました。私の説教はそれを書き留めただけです。「ご昇天」なのに「降りてくる」というのもどうかと思うのですが、とにかく「あ、これだ」と言う内容が降りてきました。それは、「復活したイエス様は、たくさんのもを背負っておられたからこそ、点に上ることができたのだ」ということです。

勘違いしてほしくないのですが、なにか条件がなければ天に上れない、と言っているのではありませんよ。そうではなく、天に上られるイエスは、手ぶらで天に上るのではなく、多くのものを背負って天に上られるので、その姿を思い描きましょうという招きと受け止めてほしいのです。イエス様のご生涯は、弱い人、貧しい人、社会の隅に追いやられている人、罪人、あらゆる立場の弱い人に寄り添い、その軛をともに担ったご生涯でした。何よりも、最期の十字架の場面では、担っても意味がないと思われる人々の罪さえ担って、御父に命を捧げたのでした。そのイエス様は勝利し、復活なさいました。

復活されて、肩の荷が下りたのでしょうか。そうではないでしょう。すべての重荷を担われたまま、復活されたのではないのでしょうか。「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。」(ルカ24・39) 手や足を見るだけで、復活したあともすべての重荷を担ってくださったあのイエス様と同じなのだわかりました。すべてを担っておられるからこそ、天に上られても私たちから離れはしないのです。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28・20) すべてを担われたまま天に上ってくださったこと、これが世の終わりまで共にいてくださるイエスの約束の保証です。

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

金曜日に、下五島地区浦頭教会の中島神父様が、亡くなられたお母様の葬儀のミサを福江で執り行いました。私は通夜の時からお祈りに出ているのですが、本当に数奇な運命を辿られたお母様だったのだなというのがお説教でわかりました。数奇な運命は、言い換えればたくさんものを担った運命だったということです。

もうすでに、勘の良い皆さまはお気づきかと思いますが、たくさんものを背負った運命を全うしたなら、神様のもとに呼ばれて、必ず天に上げてもらえるのではないのでしょうか。葬儀ミサのその時には結びつきませんでした。この「主の昇天」の説教を書いている間に、「そうかそういうことか」と感じたのです。私も、今は母も健在ですが、いつかその日がやってきます。素晴らしいお手本の葬儀ミサに、あずからせてもらったなあと感謝しました。

皆さんは、何かを背負って生きていますか。その背負っているものは、自分のため、自分に関係あるものだけを背負っていますか。もし、たくさんものを背負っているなら、それはイエス様の背負っているものを背負っている人です。イエス様は客観的には背負う必要すらないような敵対的な人々の罪さえも背負いました。私たちが、「どうしてあの人ではなく、私がこの重荷を背負っているのだろうか」と思い悩み、苦しんでいるとしたら、それはまさにイエス様の重荷を背負っているのです。イエス様の重荷を背負っている人が、生涯を終えたときにイエス様のもとに迎えられる。十分期待して良いのだと思います。迎えられないはずがありません。

今年の主の昇天、中田神父にとっては「あらゆる重荷を担われたイエス様は、復活し、天に上られた」という学びでした。みなさんにとっても、希望を持てる一週間でありますように。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 20:19-23)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。